

きらり通信

Vol.10

神奈川県立子ども自立生活支援センター
平塚市片岡991-1 TEL.0463-56-0303
<https://www.pref.kanagawa.jp/div/1329>
編集 広報委員会 印刷 (株)あしがら印刷

「ただいま、きらり」

子ども自立生活支援センター所長 妹尾 洋之



きらりの桜

この4月に所長に着任いたしました妹尾（せのお）と申します。きらりには平成29年の開設から4年間在籍しておりました。この春、久々に戻ってまいりましたきらりは、細く頼りなかった桜も太たくましくなり、満開の花をもって迎えてくれました。

桜だけではなく、それに続くつつじも、紫陽花も見事でした。旧中里学園、旧ひばりが丘学園を母体とした統合、平塚市立金目小学校・金目中学校五領ヶ台分校の開校など組織の大きな改編の中で、当初はたくさんの混乱もありましたが、この間の様々な努力や工夫によって、安定感のある「きらりの日常」が形づくられ、各セクションの協働や一体性もより強いものとなっていることを実感しました。

加えて、地域のみなさまや関係機関の方々よりますますのお力添えを賜り、「地域に根差す」という目標においても大きな実りが見られています。

9年目を迎え、なお力強く歩みを進めているきらりの姿は、私にとって、頼もしくも優しく「おかえり」と迎え入れてくれる、心強い存在に感じられました。

施設歌／五領ヶ台分校校歌である「きらり空に咲く」は「あたたかな風につつまれて」という歌詞で始まり、「こころをむすびあって」歩みを進めて行くきらりの情景が美しく歌われています。まさにこの光景が、きらりの日々の営みの中で実を結んできて

いるのだと感じます。

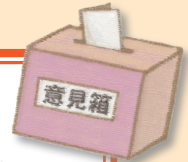
その道のりは決して平坦なものではないかもしれませんが、でももうひとつの施設愛唱歌「きらりきらり」の一節にあるように、「つまずいて転んだときはつかまっていよいよ」「困ったときに言うてみる“なんとかかなるさ”」という体験をひとつひとつ大切に重ねながら、「たぶん答えはひとつじゃない」ことに気づき、「心が元気なときはひと休みしよう、また歩き出す君はなりたいたい自分に近づいているよ」と、ふと気づくと確かな成長へと歩みを進めている、そのような日々がたくさんたくさん折り重なって、この8年間で築いてきているのだと思わずにはいられません。

これからも、この一日一日の営みを大切に続けてまいります。子どもたち、ご家族のみなさま、地域・関係機関のみなさま、そして職員一同で織りなすこうした毎日の積み重ねこそが、きらりの歴史となつて未来を切り開くものと信じつつ、いずれはどこかの時期にここを巣立つ子どもたちと、子どもたちと関わりのあったすべての人たちにとって、きらりという存在が、いつになっても変わらず「ふるさと」のひとつであり続けられることを願ってやみません。

9年目のきらりも前進を続けます。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。



近隣の柿畑



子どもの声の届く場所に ～「きらり祭子ども実行委員会」の取り組み～

支援部副部長 鈴木 康一

令和4年の児童福祉法改正において、「子どもの権利擁護」について環境整備が行われ、「子どもの意見表明等支援」の重要性が法文上にも明記されました。子どもたちが自らの生活に関わる事柄に発言し、その意見が尊重され具現化されることが、今、まさに求められています。

開設以来、当センター（以下、「きらり」という。）では、オンブズパーソン活動、意見箱の設置、子ども集会を、各フロアでは子ども会議を開催するなど、子どもの意見表明支援に力を注いできました。

このような取り組みの中で、

- *「私たちも、『きらり祭』のお手伝いをしたい！」
- *「どんな『きらり祭』にするのかを決める話し合いから参加したい！」

これは、「きらり祭」の後のアンケートに子どもたちが書いてくれた意見です。

これをきっかけに、開設以来初となる「きらり祭子ども実行委員会」を立ち上げることとなりました。障害児入所施設から4名、児童心理治療施設から5名、計9名の子どもたちが委員として手を挙げてくれました。性別や年齢、施設種別も異なる彼らが集まり、「来場者にどう楽しんでもらえるか？」をテーマに、全9回に及ぶ実行委員会を開催。子どもたちは、会場のレイアウトや装飾のアイデア、来場者に配布する歓迎の思いを込めた手作りうちわのデザイン、当日の案内係など、自分たちがやりたいこと、できることを真剣に考え、意見を出し合い、話し合いを重ねてくれました。

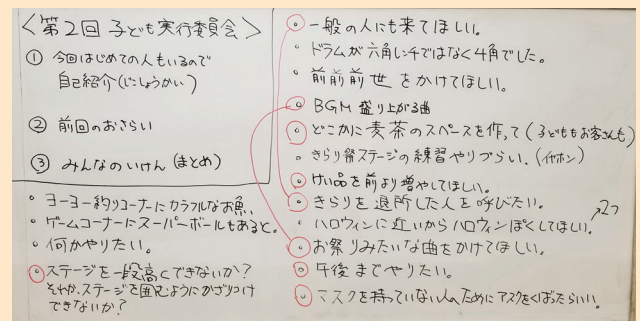
特筆すべきは、「自分の意見」だけでなく「他の人の意見」にも耳を傾け、違いを尊重しながら一つの形にまとめていこうとする姿勢が第1回目から見られたことです。

実行委員会が始まり、障害児入所施設的女子実行委員がトップバッターで自己紹介。全員が緊張している中、頑張っって自己紹介してくれたこの子に全員が拍手。その場の緊張が一気に解けて、それぞれ個性的な自己紹介へとつながりました。

施設や生活環境は違っても、「実行委員」という共通の立場に立ったことで、子どもたちは自然と主体性と協調性を発揮し始めました。

Q：子どもたちの意見はどうやって集めよう？

A：意見箱に「きらり祭の意見募集中！」って書いて集めたらどうかな？



ミーティングの様子

2週間後、集まったたくさんの意見を前に、ある委員が、「皆さん、ちょっといいですか？こんなにたくさんの意見をすべて出しても、まとまらないと思います。子ども実行委員会で、特に実現したいものに絞って、職員に報告したらいいと思いますが？」「そうしよう！」子どもたちだけで議論が展開していきます。

迎えた当日、実行委員たちはそれぞれの役割を果たし、笑顔で来場者に接してくれました。準備してきた歓迎のうちわを丁寧に配る姿、迷っている方に積極的に声をかける姿は、職員の私たちにとっても新鮮で、頼もしいものでした。

そして何より印象に残っているのは、終了後の最後の実行委員会で聞かれた子どもたちの声です。

「僕たちの意見がたくさん盛り込まれていてよかった。」

「あー、もう終わっちゃうんだ。寂しいな。」

「終わるの実感ないな。」

「こういうの、またやりたいな。」

「子どもの意見表明等支援」、日々の支援の中でどのように実践に落とし込むかは、私たち一人ひとりの意識にかかっています。今回の「きらり祭子ども実行委員会」のような実践を通じて、子どもたちが「自分の声が届いた」、「話し合っってやり遂げた」、「意見を尊重されている」と実感できるような場所(きらり)を、今後も丁寧に築いていきたいと思っています。



委員募集のポスター

きらりの「みらい・マナビ・そだち」

テーマは、0歳から18歳のそれぞれの『成長』。
きらりの子どもたちが安心して『できた』を増やしていきます

子ども第一課 みらい

乳児院では生後数日から年長児までの元気いっぱいの子どもの生活しています。成長の初めての場面への遭遇も多く、寝んねの子がある日突然寝返りをしたり、ハイハイができたり、大きな声を出すようになったり…また、一番小さかった子どもが自分より小さい子のお世話をするようになったり、イヤイヤと自己主張が強くなったり…身体だけでなく精神的にも成長する様子を、子どもとともに共有できる喜びがあります。

24時間緊張度の高い養育・支援が続きますが、子どもたちの成長を間近で見られるこの場所はかけがえのない場所です。そして今日も、私たちはまた誰かの「はじめて」を見守るために子どもたちのそばにいます。



はじめての
湘南平電波塔
を再現



子ども第二課 ひばり

「安心できる生活のために一人ひとりの意見を尊重する場所へ」

つばめフロアでは、コミュニケーションを取ることが難しい男児が多く、日々の支援の中で強みを評価し、活かした支援を行っています。スケジュールや余暇を絵や写真カードにて提示することで、日課を分かりやすくして見通しを持たせやすくしています。カードを活用することで、コミュニケーションが難しい児童も自発的にカードを持ち要求を伝えることが出来るようになりました。

入所当初は、落ち着かず、癇癪をおこしたり、時には自分や周りを傷つけてしまう子どももカードを活用することで、徐々に日課の理解や余暇活動を選択することが出来るようになりました。今後も一人一人に合わせた支援を通じて、子どもの成長を見守っていきます。

小学生から高校生の女子が生活するつぐみ・めじろフロアでは、月1回個別に担当職員と過ごす“個別余暇”を行っています。実施前からとても楽しみにしており、一緒にショッピングや、料理を一緒に作って食べたり、遊んだりして過ごしています。普段は職員を独り占めすることは難しいですが、この時はいつもと違う特別な時間を過ごします。今後も子ども達の成長を見守っていききたいと思います。



かもめ・かわせみフロアでは、中学生以上の男子が生活を共にしています。活動の中で一人ひとりの意見を大切に、余暇の時間ではそれぞれが希望した過ごし方が出来るよう工夫しています。また、職員と子どもが一对一で過ごす時間も大切にしており、外出や調理実習などは子どもと一緒に計画して実施しています。

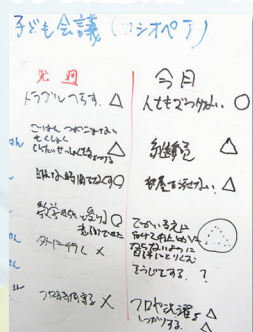
そのほか、オンブズパーソン等の意見表明の機会も活用しながら、子どもたちの声に耳を傾け、生活しやすい環境を目指しています。



子ども第三課 ぎんが

幼児ユニットのアリエスでは、おむつからトイレトレーニングを経てパンツで生活できるようになる、更衣や食事を一人でできるようになるなどの大きな成長や、本読みや知育玩具を用いて活動する「すこやか教室」やペットボトルなどを使った工作など、職員が工夫した過ごしを提供することで沢山の小さな『できた』を日々積み重ねています。低学年児ユニットのアンドロメダでは、それぞれの月の目標を設定し取り組んでいるとともに、日々の過ごしの中で上手くいかなかった場面について都度職員と振り返りをし、「大人に相談できた」「苦手なものを少し食べられるようになった」「お友達にやさしくできた」など小さな『できた』の経験を重ねています。また月に一度の子ども会議を行い、自分の意見を発表する・人の意見を聞く練習の場として設けています。

男子ユニットアースでは、令和7年度新体制からちょうど半年、大きく環境が変化し、期待と不安も大きかったかと思います。しかし、そんな変化にも負けず、子ども達が自ら考え、様々なことを頑張ろうという意識を日々感じています。登校渋りが強かった子が毎日登校できるようになったり、勉強が苦手だった子が計画を立ててコツコツ勉強するようになったり、最高学年の自覚を持ち、集団をまとめ人前で意見を言えるようになったり、以前と比べて切り替えが良くなったり、人を気遣う言動が増えたりなど日々様々な形で個々の頑張りが成長があります。また週1回ペースで子ども会議を開いています。子ども中心で意見を出し合い、生活する上での改善点や疑問点を議題に挙げ職員も助言をしながら話合います。また、1人1人一週間の目標を立て振り返りも行います。



同会議で、風呂・トイレ掃除を子どもたちで取り組みたいと提案があり実施しています。「自分たちが使っているから」との発言があり主体的に行動している姿に成長を感じています。引き続き、子ども達の頑張りが成長を応援していきます。

女子ユニットポラリスでは、皆が進級を機に出来なかったことを出来るようになろうと意欲を高めている様子が感じられます。先日の子どもの会議は、小学校高学年が司会・書記を担い、職員は見守りに徹しました。お互いの意見を順番に最後まで聞くことを意識し、和やかな雰囲気の中で自分たちの感じていることを話し、他者に共感してもらう経験を積めたことで、子どもたちからは「楽しかった」「またすぐにやりたい」との声があがりました。日常でも子ども会議での経験を思い出しながら、自分も相手の意見も大事に対人関係の基礎を学んでいます。



きらり リレートーク

「アオのハコ」

子ども第二課 田島 康隆

「アオのハコ」という漫画を知っていますか。

「アオ」とは青春や未熟さ、未来への希望を表し、「ハコ」は学校や体育館、家を表しているようです。高校生の主人公たちが日々葛藤し、理不尽に悩みながら成長していく物語です。

きらりに住む子どもたちもきらりという「アオのハコ」の中で同じように葛藤や理不尽に悩みながらも日々成長し、アオイ時間を過ごしていると感じています。

きらりは児童の施設であるため、成人になるまでに家庭や成人施設、グループホームなど地域へと移行をしなければいけません。実際つばめフロアでは私が転入してからの3年2か月で6名の児童が地域へと移行して行きました。

直近でも一人の児童が成人し、きらりを卒業しました。私にとってきらりでの人間関係の中でどの職員よりも児童よりも一番長い時間を共有したのがこの児童であり、たくさんの思い出があります。就床前に居室でストレッチをしながらお話をしたり、リビングで一緒にお絵かきやテーマに合った言葉をいくつ思いつくかを考えたり、テレビのCMと一緒に真似したり、体育館で鬼になりきり追いかけてをしたり。ハロウィンのイベントではハロウィンの仮装が怖くて苦手な本児と3年連続で一緒に別室に避難したなんてこともありました。

高校3年生になり、きらりから卒業しなくてはいけなと言われながらも受け入れたくない葛藤を他害として表出することもありました。それでもきらりを卒業することを受け入れ、宿泊体験にも行けた心の成長をとてもうれしく思いました。宿泊体験を何度かしながら、最後には本児もきらりを巣立っていきました。

さて「アオのハコ」の中で次のような言葉があります。「いつになっても思い出せるように（思い出を）大切に箱に入れておかないと」。本児がこれからの人生で私やきらりでの日々を大切な思い出として時々箱から取り出してくれるといいなと思います。そしてきらりの子どもたちの箱の中にたくさんの思い出を詰め込んでいければいいなと思いながら過ごしています。



きらりの退所の様子

ボランティア募集

行事等のお手伝いや、学習補助、衣類の補修等のボランティア活動をしていただける方を募集しています。資格や経験は問いません。ご興味のある方はお気軽にご連絡ください。

短期入所サービス

当センターでは年齢は18歳までの知的障害のある方を対象に、短期入所サービスを提供しています。ご利用を希望される方は、下記連絡先までご連絡ください。

問合せ先：0463 - 56 - 0314

当センター自立支援課（平日8：30～17：15）

「子どもの自信がついたらチャレンジ」

子ども第三課 吉田 信二郎

子どもたちは放課後になると、鬼ごっこなどをして体をたくさん動かしています。笑い声が聞こえ楽しそうに遊んでいますが、時にはけんかになってしまうこともあります。一方的に自分のやり方を押し付けたり、命令的に言うてしまうことで相手が腹を立ててしまうなど理由は様々です。そんな時はこの施設の強みである、「大人がそばにいる」ことで、お互いの言い分をしっかりと聞きつつも相手の気持ちを知っていく関わりをしていきます。数か月単位の長い目で見ていくと、他人の話を素直に聞けない子どももいつの間にか耳を傾ける回数が増え、そのことでトラブルが減ったり他者と良好に過ごす時間が増える経験を積んでいきます。他者の立場を考えた行動が見られ大人から賞賛されると、やがて自己肯定感が育まれ自信がつき、表情や振る舞いが一気にお兄さん、お姉さんになっていきます。このような成長過程は日々のフロアの職員だけの力ではなく、きらりという大きな施設の中でたくさんの大人と子どもの関わりがあってこそその結果です。

自信をつけたら今度は「チャレンジ」することに気持ちが向けられます。一例ですが、誰でもきらり祭の子ども実行委員をやることができますが、祭りの内容を企画したり、意見を出したりまとめる役割があるので、責任をもってきらりのみんなのために動くという「チャレンジ」をしようと思った子どもが実行委員に立候補をしています。実行委員の子どもは準備を一生懸命やっており、その表情には、やりがいや大きなことを頑張るぞという気持ちが伺えます。大人からも労いの声掛けをされたり、感謝されることで心が大きく育っていくのではないのでしょうか。

その他にも近隣の公民館で開催される寺子屋に行き、地域の小中学生と一緒にボランティアの先生に勉強を見てもらう体験や、床屋さんに一人で行き好みの髪型を伝えることや、バスに一人で乗って運賃の支払いをやってみる、近隣へ一人で買い物に行くこと一さまざまな場面で「チャレンジ」する機会はあります。きらりを出たその先の生活を見据え、子どもの自信がついたらチャレンジする意向を聞き、その子どもに適した機会は作っていききたいものです。



火起こしから片付けまでみんなで協力

施設開放

地域におけるコミュニティづくりや文化活動に貢献できるよう、当センターの体育館などの貸し出しを検討しています。利用希望される方は、下記連絡先までお問い合わせください。

研修案内

子どもの発達や、発達障害、愛着の問題など、「きらり」が支援する子どもに関するテーマについて、公開研修を企画開催しています。最新情報や内容・日程については、当センターホームページ内「子ども自立生活支援センター公開専門研修計画」をご参照ください。



ともに生きる社会
かながわ憲章
KANAGAWA CHARTER for an Inclusive Society